

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

## 【氏名】

伊藤 岳

## 【所属】(助成決定時)

東京大学大学院 総合文化研究科 国際社会科学専攻・博士課程

## 【研究題目】

継続・終結・再発：内戦に対する外部勢力による介入・援助の効果・メカニズムの解明

## 【研究の目的】(400字程度)

内戦研究では、第三国・国際組織(外部勢力)による介入・援助が、内戦における戦闘・暴力の展開や継続期間・終結形態・再発の蓋然性に与える効果とそのメカニズムを巡る論争が続いてきた。しかし、既存の研究には理論・実証・方法各面で課題が残る。特に深刻な課題は、既存の介入論が内戦を形作る主体の行動・相互作用や戦闘・暴力行使の展開(紛争過程 conflict process)を巡る研究と隔絶している点にある。

しかしながら、内戦の継続期間・終結形態・再発という現象は、紛争過程の具体的展開の帰結に他ならない。外部勢力による介入・援助も、国家レベルの集計値には反映されない、戦闘・暴力行使の展開のような紛争過程に影響を与えることで、内戦の帰趨を左右すると考えられる。こうした先行研究の課題を踏まえ、本研究では戦闘・暴力行使の発生地点のような位置情報を把握可能な空間データ(spatial data)を用いた実証分析、特に空間データと接合した実証的シミュレーション・モデルという方法的刷新を通して、こうした先行研究の限界を乗り越えることを目的とした。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、主に以下の作業に取り組むこととした。以下の(1)から(3)の成果は、公刊論文(国内誌)および国内および海外での学会・研究会報告の形で既に公表したほか、現在国際誌上において査読が進んでいる(revise & resubmitを受けて修正中)英語論文が1本ある。(4)については助成期間中に公刊論文・学会発表等の形で成果を公表できなかったが、論文投稿を準備中のほか助成期間終了後の2017年1月に、学会報告を予定している。

- (1) 内戦における武装勢力による暴力行使の数値シミュレーション解析：本研究計画の初歩段階として、内戦における武装勢力による暴力行使の決定要因の解析に取り組んだ。ここでは特に、(a) 地理的条件のような構造的・静的要因と、(b) 過去の戦闘の展開のような動的要因のいずれが武装勢力の活動動向を規定するのか、また両者の相対的重要性を明らかにすることを目的とした。具体的には、アフガニスタン戦争(2001-)を事例に、アフガニスタンのローカルな地理・社会経済的条件と武装勢力の活動動向を把握可能な空間データと接合した数値シミュレーション・モデルを構築・解析した。
- (2) 内戦に対する外部勢力による武力介入が、武装勢力による暴力行使の動静に与える影響の計量分析：アフガニスタン戦争では米軍・ISAFが展開し、武装勢力との戦闘にも関与している。外部勢力による武力介入の影響を明らかにするため、米軍・ISAFによる攻撃・暴力行使が、それに次ぐ武装勢力による攻撃・暴力行使に与える影響を巡る計量分析に取り組んだ。
- (3) 内戦における戦闘・暴力行使の時間的・空間的拡散のパターンが、内戦の継続期間・終結形態に与える影響の計量分析：主体の行動・相互作用や戦闘・暴力行使の展開(紛争過程 conflict process)が内戦全体の継続期間・終結形態に与える影響を明らかにするため、アフリカ諸国をはじめ、多数の国家・地域のデータを用いて、戦闘・暴力行使の時間的・空間的拡散のパターンが、内戦の継続期間・終結形態に与える影響を巡る計量分析に取り組んだ。
- (4) 内戦下の国家・地域に対する外部勢力による援助が、それに次ぐ戦闘・暴力行使の展開と内戦の継続期間・再発の蓋然性に与える影響の計量分析：内戦下の国家・地域に対する外部勢力による援助が、

それに次ぐ戦闘・暴力行使の展開と内戦の継続期間・再発の蓋然性に与える影響を巡る (a) 先行研究の体系的整理と (b) 空間データを用いた実証分析に取り組んだ。

#### 【結論・考察】(400字程度)

上記【研究の内容・方法】の作業から、以下の結果を得た(番号は【研究の内容・方法】と対応)

- (1) 内戦における武装勢力による暴力行使の数値シミュレーション解析：構築したシミュレーション・モデルは、過去の戦闘・暴力行使の履歴が、人口・地理等の構造的・静的要因と同程度以上に、武装勢力による周辺地点での活動動向を規定することを示し、さらに、(b) 戦闘・暴力発生地点の約 80% を正確に予測・説明した。成果をまとめた論文は、助成期間中に学会・研究会等で報告したほか、現在学術誌(国際誌)上で査読が進んでいる。
- (2) 内戦に対する外部勢力による武力介入が、武装勢力による暴力行使の動静に与える影響の計量分析：政府軍および外部勢力による攻撃・暴力行使がそれに次ぐ武装勢力の活動動向を左右する論理・メカニズムを理論的に整理した上で、政府軍および外部勢力による攻撃・暴力行使が、かえって武装勢力の活動を活発化させてしまうこと、アフガニスタンを事例に明らかにした。成果をまとめた論文は、助成期間中に国内の学術誌に掲載された。
- (3) 内戦における戦闘・暴力行使の時間的・空間的拡散のパターンが、内戦の継続期間・終結形態に与える影響の計量分析：多数の内戦における戦闘・暴力行使の発生地点・時点を把握可能な空間データを用いて、(a) 戦闘・暴力の拡散それ自体は内戦の継続期間・終結形態を有意に左右しないものの、(b) 特定の形での戦闘・暴力の拡散は、内戦の長期化を招くことが明らかになった。成果をまとめた論文は、助成期間中に学会・研究会等で報告したほか、現在学術誌への投稿を準備している。
- (4) 内戦下の国家・地域に対する外部勢力による援助が、それに次ぐ戦闘・暴力行使の展開と内戦の継続期間・再発の蓋然性に与える影響の計量分析：(a) 体系的なレビューを通して、先行研究には内戦への援助の「開始」がそれに次ぐ戦闘・暴力の展開や内戦生起に与える影響を明らかにしてきた一方、援助の「中断」の影響を捉える視点が欠落していることを明らかにした。これを踏まえ、(b) 多数の内戦における援助の展開地点・規模と戦闘・暴力行使の発生地点を把握可能な空間データを用いた実証分析に取り組んだ。(a) のレビュー論文および (b) の実証分析結果の報告は、助成期間終了後を予定している(具体的には、(a) については学術誌へレビュー論文を投稿準備中、(b) については分析結果を 2017 年 1 月の国際学会で報告予定)。

(以上)